

## 押川春波の「海底軍艦」における 国家（主義）的マスキュリティの翻訳問題

シャラリン オルバー  
Sharalyn ORBAUGH

押川春波はジュール・ヴェルヌや十九世紀の冒険小説家の影響を多大に受けたといわれている。ヴェルヌの小説は今日でさえ、多くの人々を魅了してやまない。そんなヴェルヌの影響を受けた春波の傑作『海底軍艦』（1900、明治33）を現在、私は英訳している。果たして、ヴェルヌのように二十一世紀の読者を魅了し、愛読されるような英訳ができるのかという疑問を抱いているところである。特に『海底軍艦』の国家主義的マスキュリティの色調を翻訳することはいくつかの問題がある。それは、「日本男児」のような19世紀当時の言葉の意味合いに合う英語訳をつけることであるが、さらに、登場人物の性格を的確に翻訳することはより一層難しいのである。

『海底軍艦』の登場人物は、一人を除いて、すべて男性である。彼らは様々なタイプのマスキュリティで表現され、そのすべてが肯定的に描かれている。例えば、無口で勇敢、才気煥発で厳格な桜木海軍大佐がいる一方、感激しやすく、戯け者の武村兵曹や感情的で多弁、おまけに好奇心の強い、語り手の柳川龍太郎がいる。さらに、8歳の男の子、日出雄少年も登場する。これらの登場人物には、それぞれ社会的地位、軍隊の階級、教育レベル、年齢、また性格によって、異なる話し方（文体）が用いられている。しかし、彼らみんなを共通して“男らしく”させているものがある。それこそが、彼らが抱いている究極な国家主義なのである。可愛らしく、可憐でペットである日出雄少年でさえ、

極めて国家主義的な言葉を使っている。

今日の読者にとって、そのような愛国主義的な言語は不快なものであり、また登場人物たちに魅力を感じないかもしれない。しかし、明治33年当時は、冒険小説に出てくるキャラクターたちが近代化していく国家間ヒエラルキーの中で、日本人としてのアイデンティティを誇りとしたことは当然であったのである。それ故に、翻訳上の問題は現代の読者が当時良識とされたマスキュリニティの範囲、また、ふさわしいマスキュリニティと国家主義の強い結びつきを理解できるように、『海底軍艦』で用いられている様々なタイプのマスキュリンな勇ましい文体を的確に翻訳することが一番の問題なのである。